經濟論叢

第124巻　第5・6号

河上　肇生誕100年記念号

福田徳三と河上　肇……杉　原　四　郎　1
初期河上における経済政策論……大　野　英　二　21
河上　肇の「国家論」小考……住　谷　一　彦　50
漢詩人河上　肇の旧蔵書……一　海　知　義　65
河上　肇と「加算と減算」……高　寺　貞　男　87
『改版社会問題管見』序文……山　之　内　　靖　99
財政問題よりみた河上　肇「貧乏物語」……池　上　　惇　104
河上　肇における科学と宗教と哲学……古　田　　光　120
資　料
京都大学時代の河上　肇……細　川　元　雄　141
経済学会記事
経済論叢　第123巻・第124巻　総目録

昭和54年11・12月

京都大學經濟學會

『改版社会問題管見』序文

山之内　靖

以下に紹介するものは，いったん印刷にまで廻されながら遂に日の目を見ることなく終った『改版社会問題管見』の「序文」である。この「まぼろし」の「序文」については，小島祐馬氏が『河上肇著作集』月報（昭和39年7月，第七巻付録）に次のように記している。周知のように大正七年に出された『社会問題管見』は大正九年にいたって大幅に改訂され，ほとんど別箇の著作という相貌を呈して再刊された。しかるに河上はこのような大改造をおこなうにいたった経過について何らふれることなく，七年版と同一の序文を付したまま放置したのであった。「こと著述に関するかぎり，瑣末のことまで親切に説明される河上さんとしては，まことに異例のことであって，注意深い読者は，当時おそらくこの点に疑念をいだいたことであろうと思う」。この異例の事態がひき起された背景には，実は次のような事情があったのだ，と小島氏はいう。「大正九年の三月半ば過ぎであったと思う，私は櫛田民蔵君と二人で河上さんをその自宅に訪問していた。そこへ弘文堂から『改版社会問題管見』の製本ができたといって，見本を一冊届けて来た。河上さんは一瞥しただけでそれを私どもに示した。見てみるとそれには八頁に亙る長い序文がついていて，前にいったような内容の差し替えを説明した外に，『貧乏物語』を書きはじめた頃からの社会状勢の急激な変化や，それにともなう河上さん自身の心境の変化などが詳しくそこに書かれてあった。河上さんは櫛田君にたいし『どうでしょう』とただ一言いったが，櫛田君は何とも答えず，不機嫌な顔をして首をかしげていた。すると河上さんは待たせてあった使にその見本を返し，弘文堂に命じて，すでに刷り上っていた千冊分のその序文を全部破棄して，……二年前の『社会問題

管見』の序文を，そのままそこに挿入させたのであった。これが同一の序文が二度の勤めをさせられた由来である」。

この破棄されたはずの「まぼろし」の「序文」は，しかし，幸なことに弘文堂が見本刷りの一冊を小島氏にも托していたために，今日まで辛うじて残されることとなった。その一部分は小島氏によって前記月報中に引用されているが，ここにあらためて，その全文を公表することにしたい。ここには『貧乏物語』にはじまり，『社会問題管見』，『改版社会問題管見』をへていよいよ『社会問題研究』の発刊にいたりつく河上の思想的プロセスが簡潔にしるされていて興味深いものがある。さらにまた，小島祐馬氏によって語られた上のエピソードは，こうした河上の思想展開に占めた櫛田のかかわりをあらためて明らかにしているという点でも，貴重な証言というべきであろう。

なお，本資料は，小島祐馬氏の令息，小島懋氏の御好意によって利用可能となった。誌上を借りて同氏に謝意を表したい。

改版　社会問題管見序

『改版，社会問題管見』とは，私の旧著『貧乏物語』の断篇と，同じく旧著『社会問題管見』の断篇と，其外に若干の随筆とを，編纂して新たに一書と成せし小冊子の名である。

*　　*　　*

私は大正五年（一九一六年）の九月から十二月にかけて，『大阪朝日新聞』に『貧乏物語』と題する続物を載せ，翌大正六年の三月には，之を一冊子に纏めて，再び世に公にした。さうして大正八年五月に第三十版を出したのを最後として，それ以来今日に至るまで，之を絶版にしてゐたのである。

『貧乏物語』の絶版は，もつと早く断行すべきであつた。それが，そんなに延び延びになつたのは，今から思ふと，自著に対する著者執着の致せる禍であつて，私の竊に耻づる所である。

大正五年の秋から冬にかけて，私が『朝日』にかの物語を連載してゐた頃は，思想界の様子が今とは余程違つてゐた。当時私は，一九四〇年を俟たずして世界に一大革命起るべし，といふ一学者の言を引いて，物語の筆を起したのであつたが，実は其翌年に露西亜であのやうな大革命が起らうとは，私の全く予期しなかつた所である。しかし露西亜には革命が起り，次いで独逸にも革命が起り，思ひ設けざる形に於て，世界戦争は其局を結ぶことゝ為つた。此の如き時勢の変が，『貧乏物語』の著者に少からぬ影響を与へ，今も猶与へつゝあることは，著者自ら能く意識する所であるが，しかし斯かる影響の波動は，独り書斎裡に於ける一学窮に及んだのみではなくて，広く社会各階級の全般に及んだやうである。只今から大正五年の秋を顧みると，殆ど隔世の感がないでもない。

現に私が『朝日』にかの物語を連載し，十一月の中旬に其下篇に入つて，経済組織改造のことを述べかけた時，私は左程までの心配をせずに，社会主義といふ言葉を使つて何事かを書き始めたのであるが，其第一回分はゲラ刷にされたまゝ，当時の『朝日』の編輯長たりし鳥居素川君から，送り返へされた。それは一には，新聞紙が無用の誤解を受けても困るといふ心配からでもあつたらうが，主としては，著者が不慮の筆禍を蒙つては気の毒だといふ親切からであつた，と私は考へる。さう云ふ時代であつたから，私は経済組織の改造に就ては，思ふ所を十分に述べ得なかつた事情が無いではなかつたが，しかし私は，嘗て山川均君が批評されたやうに，当時は組織改造と人心改造との二頭立ての馬車を駆つて居たのであるから，組織改造の赤馬の方には可なり手綱を弛めて仕舞つても，人心改造の白馬をば思ふ存分に鞭うつことによつて，此物語の結論に達することが出来た。けれども今日になつて見ると，其結果は，車を右へ右へと曲げて仕舞つて，本通りをずつと外れたやうである。私は之より先き十数年前の明治三十八年に，偶然にも同じやうに九月から十二月にかけて，『社会主義評論』と題する続物を『読売新聞』に載せたことがあるが，其時も結末は人心改造論に落ちて仕舞つた。兎角さう云ふ所へ落ちたがるのが，堺利彦君の批評されたる如く，私の『抜き難き人道主義の病』なのであらう。

けれども『貧乏物語』を書き終へてから，——正確に言へば，世界の大戦が極頂に近づくにつれて，——世界には様々の事件が起るやうになり，又日本の思想界にも，僅かの間に，急激なる変化が起つたやうに思へた。其外様々の出来事——『貧乏物語』に対する親切なる諸家の批評，就中，小泉信三君の『三田学会雑誌』に於けるそれ，及び藤田喜作君の『日本社会学院年報』に於けるそれ——が，私に有益なる刺戟を与へたので，私は自分の思想に向つて，多少宛の自家批評を加へることが出来た。さうして朦気ながらも，私は或種の新たなる道に出口を見出すことが出来た。其結果，組織改造の赤馬と人心改造の白馬とが全く一匹の馬に融合して仕舞つて，之ならば転覆することなしに，大道を走ることが出来やうか，と思ふやうになつた。そこで私は，大正八年の一月に『社会問題研究』の第一冊を公にし，それに引続き毎月又は隔月に，其続篇を公にする計画を立てた。私は一切の新聞雑誌から離れて，自分独りで此孤城に立て籠らうと決心した。『或医者の独語』といふ随筆は，即ち其時の作である。

世の中が幾分か変つて来た，さうして其れにつれて，私の思想も亦幾分か変つて来た。『貧乏物語』は此時に絶版とすべきであつた。それが同年の五月まで延びたのは，前にも述べた通り，自著に対する私の憐むべき執着の結果に外ならぬ。

それでも其から早や十箇月が過ぎた。此間『物語』の出版者は，屢々私に其改版を勧めたが，その中にその中にと云ひながら，遂に今日となつた。さうして今改めて之を繙き，私は，この古き衣はとても繕へるものでないと悟つた。私は其出版者が，快く私の希望を容れて，永久に之が重刷を断念したることに対し，感謝の意を表するものである。

斯様な訳で『物語』の改版は全く思ひ止まつたが，しかし今復た未練がましくも，其上篇と中篇と，それに下篇の一小部分とを附け加へ，之を『貧乏物語断片』として，『社会問題管見』と合併することに決意した。茲に公にする所の『改版，社会問題管見』の前篇が即ち其れである。此形見は，『物語』の全

文元と二百九十六頁ありし中より，百六十三頁だけを活かしたものである。一旦『発売禁止』にしたものを，更に『検閲』して其大半を抹殺し，死んだものを世に出すのは，見つともないに相違ないけれども，姑く読者の寛容を請ふの外はない。

*　　*　　*

『社会問題管見』は大正七年の九月に公にしたもので，元と随筆十章を輯めて置いたが，今改版に際し，其中より七章を削除し，新たに六章を加へて，之を本書の下篇に収め，仮に『社会問題雑著』と題して置いた。削除したるものは，『スマアトの一経済学者の第二思想』，『ラスキンの此最後の者にも』，『奢侈と貧困』，『未決監』，『生産政策か分配政策か』，『早急と持久』及び『婦人問題雑話』が即ち其れである。最初からのを残したものは，『共同生活と寄生生活』，『マルクスの資本論』及び『教育と遺伝』の三章に過ぎぬ。

新たに加へた六章は，大部分大正七年の秋から冬にかけて筆を執つたもので，『社会問題研究』の創刊を思ひ立つた迄の作物である。従て『或医者の独語』が，その最終篇となつた。なほ之に引続く著者の思想は，殆ど総て『社会問題研究』にぶち込んであり，今後も其れにぶち込む積りであるから，現在に於ける彼の立場は，改めて茲に述ぶることを略する。若し夫れ，その現在の立場よりしたる旧著の『発売禁止』と『抹殺』とが，果して如何なる程度まで，他の其れ其れの立場にある人達の気に入るか，——又は全く気に入らぬかは，——著者の敢て関せざる所であり，又関し能はざる所である。

大正九年三月初三

河　上　　肇